瀬戸内町 町制施行60周年

記念要覧

絆

AMAMI ISLANDS
SETOUCHI
鹿児島県瀬戸内町
KAGOSHIMA AMAMI ISLANDS

町長あいさつ

瀬戸内町長　鎌田愛人（かまだ なるひと）

町制施行60周年「絆」と共に、次の10年へ

昭和31年9月1日に旧西方村・旧実久村・旧鎮西村・旧古仁屋町の4町村が合併し、瀬戸内町が誕生してから60年の時が経ちました。

これまで、本町発展のためにご尽力いただきました町民の皆様方をはじめ、多くの関係者に深甚なる感謝を申し上げます。

本町は、奄美大島の最南端に位置し、大島海峡を中心に、東シナ海の大海原に囲まれた、自然あふれる海洋のまちです。

世界でも類を見ない美しい海や豊かな森には、「色鮮やかなサンゴ礁」や「アマミノクロウサギ」をはじめとする、希少な動植物が生息しており、生物多様性を有していることから、平成29年3月には、奄美群島が全国で34番目の国立公園（奄美群島国立公園）に指定され、平成30年のユネスコ世界自然遺産登録へ向けて気運が高まっております。

また、先人達のたゆまぬ努力によって「島唄」や「諸鈍シバヤ」「油井の豊年踊り」などの民俗芸能が伝承されてきました。

その豊かな自然・文化・郷土の歴史を活かした、地域振興に取り組むとともに、様々な分野でご活躍されている町民の皆様や全国各地の郷友会、役場職員と対話を交え、知識や情報を共有しながら力を結集し、まちづくりを実現する「チームせとうち」を旗印に、「絆で創る、魅力あふれる豊かなまち」を目指して努めてまいります。

この要覧は、まちの過去・現在・未来の姿を紹介するものです。本町への理解を深め、新たなまちの魅力を発見していただく一助となれば幸いです。

高知山より大島海峡を望む

AMAMI ISLANDS
SETOUCHI TOWN

CONTENTS

1 位置図・町長あいさつ・町花町木
3 島ごよみ（春夏秋冬）
9 せとうちブランドのご紹介（天地海のめぐみ）
11 せとうちマップ

13 瀬戸内町 町制施行60周年記念式典・祝賀会
15 記念行事

17 写真が語る瀬戸内町60年の記憶

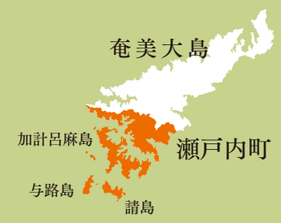
22 未来に伝えたい私たちの「集落遺産」
23 旧古仁屋町
21 旧西方村
35 旧鎮西村
43 旧実久村

49 瀬戸内町の歴史概略
53 2016瀬戸内町 町勢要覧
55 農業のまち
57 水産業のまち
58 安心・安全のまちづくり
59 すこやかなまちづくり
60 教育のまちづくり
61 いきいき楽しく学べるまちづくり
62 行政
63 議会
64 歴代町長・名誉町民
82 資料編
町章・町民憲章・町民歌

〈町花〉 ハイビスカス

〈町木〉 ガジュマル

〈町木〉 ソテツ



春

SPRING

南島の冬、海岸では北風が白波を立て、リュウキュウアサギマダラが集団で越冬する風物詩が見られます。濃いピンク色のヒカンザクラが山郷から咲き始めると、さとうきびの収穫シーズンが訪れます。

ヒカンザクラ開花
（1月初旬～2月初旬）

糖度が増す1月から春ごろが、さとうきびの収穫シーズン。

身を寄せて越冬する
リュウキュウアサギマダラは、
暖かくなると羽を広げ羽ばたく

ホエールウォッチング
（2月～3月末）

SETOUCHI
AMAMI ISLANDS
SHIMA GOYOMI

島ごよみ

色彩豊かな奄美の四季。

世界自然遺産登録へ期待が膨らむ島々では、太古からの生命が輝き、
自然への畏敬の想いは歌や踊りを育んできました。

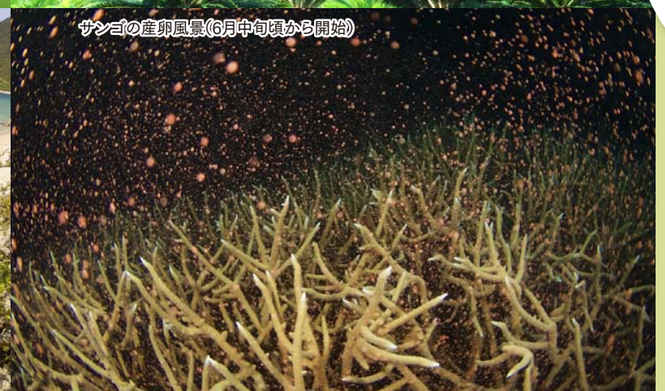
鹿児島県指定天然記念物／アマミイシカワガエル

国指定天然記念物／アカヒゲ

ソテツの新緑（3月～6月頃）

旧暦3月3日の浜遊び

デイゴの開花（5月～6月）



サンゴの産卵風景（6月中旬頃から開始）

芽吹く いのち

国指定天然記念物
ルリカケスの子育て

南島の春は萌えるいのちで賑やか。山々は美しい新緑となり、森では鳥たちがヒナたちとともにさえずり始めます。暖かな海では、アオサが美しく色づき、サンゴの産卵がはじまると、自然が輝きだします。

アマミホシゾラフグが作るミステリーサークル

瀬戸内町で2015年に発見され、日本で初めて世界の新種トップ10に選ばれたアマミホシゾラフグ（写真提供／マリンステイション奄美）

新生児の初土俵

島ごよみ AMAMI ISLANDS SETOUCHI SHIMA GOYOMI

いの輝く夏 SUMMER

躍動する夏。早い梅雨が終わると、瀬戸内町の海は鮮やかな青い色を増し、マリンスポーツや祭りなどで多くの観光客を迎え、活気を帯びてきます。

国内最大規模の奄美シーカヤックマラソンin加計呂麻大会（7月第一日曜日）

色鮮やかなサンゴ礁

舟こぎ競争（8月中旬）毎年、みなと祭りで熱戦が繰り広げられる

SETOUCHI SHIMA GOYOMI

AMAMI ISLANDS

暑く燃えた夏が過ぎ、南島に新北風(ミイニシ)が吹きはじめると、瀬戸内町はスポーツイベントや豊年祭などの伝統芸能が目白押し。さわやかな秋晴れのもと、老若男女が島の行事を楽しみます。やがて、暖かい南の島々にも北風の吹く短い冬が訪れ、新しい年を迎えます。

ツワブキ(11月頃開花)

伝統的な正月の三献料理

加計呂麻島ハーフマラソン
(11月第2日曜日)

秋

AUTUMN

諸鈍シバヤ
(国指定重要無形民俗文化財／旧暦9月9日)

冬

WINTER

北風が木々を揺らす

油井岳から見た夕景色

豊かな時が流れる

国指定特別天然記念物
アマミノクロウサギの子育て

サキシマフヨウ(10月頃開花)

冬の風物詩のイザリ(夜漁)風景

ソテツの実収穫

大島海峡で育つ半円形のマベパール

ジューシーな甘さで人気の奄美のたんかん

瀬戸内町は、皇室献上のパッションフルーツ産地

天の恵み Gift from the Sun

海の恵み Gift from the Sea

AMAMI ISLANDS SETOUCHI BRAND

瀬戸内町の特産品 せとうちブランド

温暖な気候と地の利や伝統を生かした、たんかんやパッションフルーツ、マンゴーなどの果物のほか、海産物ではクロマグロや真珠、クルマエビの養殖が盛んです。また、伝統的な本場奄美大島紬のほか、黒砂糖の加工品や畜産業も瀬戸内町が誇るブランドになっています。

地の恵み Gift from the land

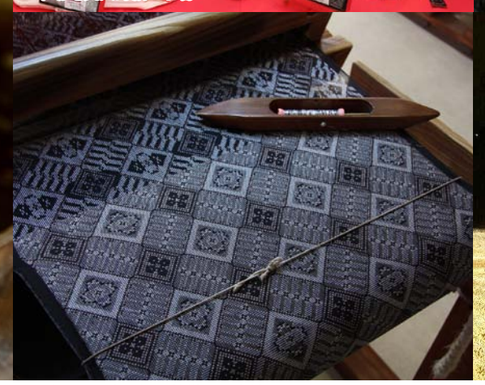
クルマエビは、高級食品として人気

美しい海から作られる自然塩

瀬戸内町は国内有数のクロマグロ養殖の産地

長寿の島に伝わる伝統の「きび酢」

本場奄美大島紬の小物


泥染めと緻密な絣が特徴の大島紬

子牛の生産

ミネラルたっぷりの黒砂糖

加計呂麻島展示・体験交流館（加計呂麻島諸鈍）

シェアサイクル（加計呂麻島）

いっちゃむん市場（加計呂麻島瀬相）

フェリーかけろま

大島紬織工養成所（古仁屋）

海上タクシー

せとうち
マップ

SETOUCHI MAP

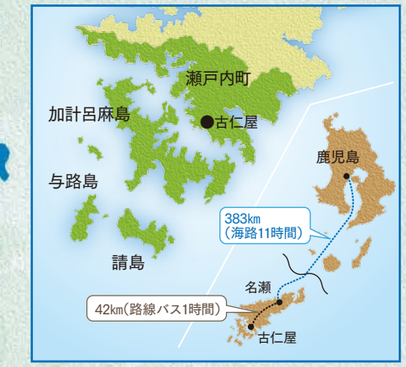
満天の星のまち

海と島唄と

うも〜れ、せとうち

奄美大島南部に位置し、
大島海峡をはさんで加計呂麻島、
請島、与路島のほか、
多くの無人島をかかえる瀬戸内町。
変化に富んだ美しいリアス海岸と
竜宮城のような海中景観、
いにしえの風情を彷彿とさせる
集落景観や伝統芸能は、
奥深い魅力に富んでいます。
さあ、よーりょーり（ゆっくりゆっくり）、
島旅を楽しんでみませんか？

祭りや祝いの席に島唄は欠かせない



ミヨチョン岳（請島）

釣りのメッカとして

定期船せとなみ

水中観光船

壮大でロマンあふれる天の川が見られる

古仁屋高校書道部によるオープニングパフォーマンス

町民歌を斉唱する児童たち

SETOUCHI AMAMI ISLANDS 60th Ceremony 祝

瀬戸内町 町制施行60周年 記念式典・祝賀会

古澤奈那美さんによる祝い歌の披露

祝賀会での乾杯

吹奏楽団「がじゅまる」の演奏とともに
瀬戸内町の歴史を映像で振り返る

古仁屋(童子)八月踊り研究会による八月踊り

関西瀬戸内会による舞踊

瀬戸内町町制施行60周年記念式典は、平成28年10月15日、清水公園総合体育館において開催されました。住民や関係者、関東や関西など全国の郷友会会員を含め、約400人が出席しました。昭和31年9月1日に旧実久村、旧鎮西村、旧西方村、旧古仁屋町の4町村が合併し、現在まで歩んできた歴史を振り返りつつ、さらなる未来への飛躍を誓い、町の節目を祝いました。

六調で締めくくり

RIKKIさんによる歌謡ショー

鎌田町長による式辞

青年団代表による町民憲章朗読

瀬戸内町の発展に尽力した個人や団体など
104人が表彰され、代表者に賞状が手渡された。

受賞者のひとり
義永秀親元瀬戸内町長

来賓祝辞／林健二県議会議員

来賓祝辞／金子万寿夫衆議院議員

クロマグロの解体ショー

昭和37年の加計呂麻島を記録した写真集を
出版したヨーゼフ・クライナー氏

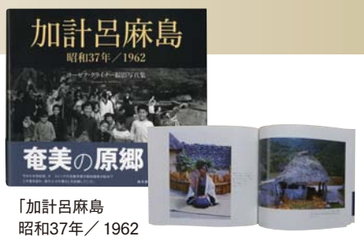
会場風景

瀬戸内町 町制施行60周年 記念事業

60th AMAMI ISLANDS SETOUCHI Commemorative event 祝

2016加計呂麻島ハーフマラソン
（平成28年11月13日／加計呂麻島）

ゲストランナーの
「猫ひろし」さん



「加計呂麻島
昭和37年／ 1962
ヨーゼフ・クライナー撮影写真集」
発行（平成28年11月1日）

企画展「琉球大学資料にみる奄美群島の
自然とくらし」（平成28年11月15～27日／
瀬戸内町立図書館・郷土館）

徳永ゆうきさんと城南海さんによる
奄美大島帰郷チャリティーコンサート
観光大使にも任命された（平成28年5月1日／清水公園総合体育館）

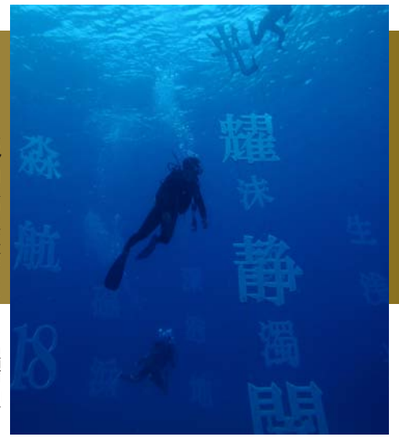
コニコーン（街コン）古仁屋で開催された出会い交流事業
（平成28年4月30日／古仁屋市街地）

第40回瀬戸内町文化祭
（平成28年11月15日～20日
／清水公園総合体育館）

公開シンポジウム「地方創生とシマの未来」
（平成28年11月19日／清水公園総合体育館）

第26回わんぱく相撲奄美大島場所in瀬戸内
（平成28年5月1日／大湊緑地公園相撲場）

第24回2016奄美シーカヤックマラソン
in加計呂麻大会（平成28年7月3日／大島海峡）



第17回水中展覧会アクアート in 瀬戸内町
（平成28年8月20日～22日／嘉鉄湾）

第36回瀬戸内町みなと祭り
（平成28年8月19日～8月20日／古仁屋市街地）

瀬戸内町商工まつり（平成28年12月18日／古仁屋市街地）

琉球舞踊公演（平成28年12月11日／清水公園総合体育館）

瀬戸内町地域女性団体連絡協議会主催
第8回親睦グラウンドゴルフ大会
（平成29年1月22日／清水運動公園）

第41回瀬戸内町駅伝競争大会（平成29年1月8日／古仁屋市街地）

第32回瀬戸内町町民体育大会（平成28年11月20日）／清水運動公園）

第20回奄美大島相撲選手権大会
（平成28年10月30日／大湊緑地公園相撲場）

写真が語る瀬戸内町 六〇年の記憶

昭和三〇年から六〇年間の歩み

大火後の焼け跡とガレキ（昭和33年）〔尾崎えりか氏提供〕

大火で焼失した役場（昭和33年）〔尾崎えりか氏提供〕

大火前の古仁屋。浜下りの風景（昭和30年頃か）〔藤谷曜氏提供〕

大火翌日の古仁屋（昭和33年）〔重山写真館提供〕

昭和35年（大火後1年半でできた古仁屋郵便局）〔竹原源静氏提供〕

焼け野が原をこえて

今から六〇年前、瀬戸内町が誕生した。昭和三一年、それまでの四つの町村―実久村・鎮西村・西方村・古仁屋町―が合併して誕生した。合併に至った理由は、直接的には県の合併勧告があったが、当時、与路島と請島の住民が、鎮西村役場がある押角に行くには、村営船が古仁屋を経由するために三日がかりにもなるという実情も後押しした。町名は、奄美大島南部の一帯が、古くから「瀬戸内」と呼ばれていたこともあって、大きな議論が巻き起こることなく「瀬戸内町」に決まった。

昭和二八年に日本復帰を果たし、その約三年後に新たな希望を持ってスタートした瀬戸内町であったが、順風満帆の船出ではなかった。昭和三三年十二月二七日の午後十一時半頃、役場がある中心地・古仁屋で発生した火災は、冬場の強風にあおられて燃え広がり、実に市街地の九〇％が焼失した。これによって古仁屋の街は、戦時中に空襲で焦土となってから約一〇年後、再建しつつあったなかで、ふたたび焼け野が原となった。古仁屋は商業の中心地でもあったことから、経済圏を共にする瀬戸内一帯の人々の生活に与えた影響は少なくなかった。大火を契機に、古仁屋の市街地は区画整理が行われた。道路は拡張され、整然とした道路体系がつくられた。いわば、現在の古仁屋市街地は、古仁屋大火後の〈燃えない街づくり〉を目指して作られた風景ともいえるだろう。

瀬戸内町域の人口は、すでにこの頃から減少傾向に入りはじめていた。昭和三〇～四〇年にいたるまでの一〇年間で、約五〇〇〇人が減少した。時代的に、日本は高度経済成長期に入り、農村部から都市部へと人口が流出しはじめていた。瀬戸内町の人口減少は、何も最近のことではなく、瀬戸内町誕生時から抱えてきた課題でもあったのである。

解説＝町 健次郎（瀬戸内町図書館・郷土館）

第1回婦人運動会（昭和46年）

中央公民館（昭和41年）

拓南製糖工場（昭和46年）

公害企業進出反対町民集会（昭和49年）

第1回町文化祭（昭和52年）

第1回町駅伝大会（昭和52年）

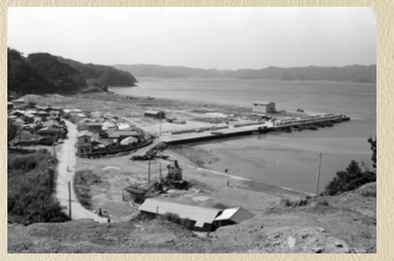
昭和四〇年代の瀬戸内

瀬戸内町の誕生時、農作物では山の傾斜地も利用したパイナップルが生産されていた。これは復興事業として進められたものであったが、生産量が不足して軌道に乗せることはできなかった。また、昭和三九年には、奄美群島の豚の飼育頭数の多さに関心を示した竹岸畜産工業を誘致し、須手に加工場を完成させた。しかし、原料の豚が集まらず、わずか数日の操業で頓挫した。基幹作物であるサトウキビをめぐっては、各所で生産組合による小型工場経営の製糖が行われていた。昭和三八年になって、大型の拓南製糖工場が古仁屋の瀬久井に建設されたが、やはり、原料不足で赤字操業が続き、昭和四六年に操業中止となった。このような産業基盤が安定しない中、昭和四〇年代末～五〇年代初頭に入ると、石油備蓄基地や原子力潜水船「むつ」といった外部からの企業などの、一発逆転の経済浮揚を狙った誘致が争点になっていった。

昭和四〇年代は、現在の社会教育につながる施設や行事が登場し始めた時期でもあった。昭和四一年には、古仁屋に中央公民館が竣工した。当時としては規模も大きく、モダンな白亜の殿堂として高い評価を受けていた建物であった。現在は取り壊されたが、そこでは役場関係の行事や選挙の投票場、結婚式、成人式などが行われた。公民館広場は、古仁屋の十五夜、高千穂神社の浜下りの御旅所にもなっていったことから、そこでの町民の思い出はつきないことだろう。地理的に広い瀬戸内町では、その後、公民館の分館も各所に作られていった。また、この公民館が担っていた郷土資料の収集と図書受入れの機能は、後に図書館・郷土館の建設にもつながっていった。文化祭、駅伝大会は、昭和五二年の第一回開催から今に至っている。昭和四六年には婦人運動会が開催された。これが現在の町民体育大会のルーツである。スポーツを通じての交流は、今も生活のなかで重要な位置を占めており、清水公園陸上競技場（昭和六〇年完成）と清水総合体育館（平成元年）はその拠点になっている。

管鈍小学校花天分校閉校(昭和52年)

昭和40年代の古仁屋風景〔古美智江氏提供〕


瀬久井埋め立て工事(昭和49年)

古仁屋市街地(昭和53年)

瀬久井の５階建住宅(昭和51年)

過密化と過疎化

大火後の古仁屋の街の概観は、区画整理によって道路が広くなったことが目につくほど、家屋は色もカラフルなトタン葺きの平屋造りで、海岸から山手まで緩やかなスロープをなして一望に見渡せるような環境であったという。合併からほぼ一〇年間で古仁屋の人口は約八〇〇人増加した。鉄筋コンクリートの高層建築が出はじめ、都市的景観が造られていくなかで古仁屋は海面の埋め立てもすすめられていった。

そもそも瀬戸内町は森林面積が全体の八七％を占めており平地が少ないことから、古仁屋の埋め立て工事は大火前から着手されてはいた。現在の漁協、吉田海運がある辺り、そして物産館、船津団地がある辺りの土地は、昭和三三年末にはすでに埋め立てが完了していた。昭和四六～四八年にかけては、船津東側の瀬久井団地C、D、E棟がある辺りが埋め立てられた。昭和五二～五三年にかけては、現在、海上タクシー等の事務所、Aコープなどがある下間原が、昭和五四～五五年にかけては、春日地区の現在は葬祭店、マンション、パチンコ店がある辺りが埋め立てられた。昭和五六～六一年にかけては芦瀬地区の、現在は警察署、図書館、消防署、特別養護老人ホーム奄美の園がある辺りが埋め立てられた。平成四年には、「コニヤ二一プラン(古仁屋港湾再開発構想)」が発表され、以後、コーラル橋とその周辺一帯が整備されていった。

このように瀬戸内町の中心地・古仁屋が過密した市街地的景観を獲得していった一方で、各集落の人口減少は加速していった。昭和四〇～六〇年の二〇年間で、古仁屋のみでは二五七人の減少に留まっていたのに対し、古仁屋を除く瀬戸内町域では七八九八人もの人口が減少した。

象徴的なものは、児童生徒の減少にともなう学校の統廃合だろう。瀬戸内町誕生時、町内には独立小学校七校、分校二校、独立中学校三校、小・中学校併設校一五校の計二七校がおかれていた。それが六〇年後の現在は、独立小学校五校、独立中学校二校、小・中学校併設校五校の計一二校と半減した。

久慈名柄道路開通(昭和47年)

はいびすかす号抜港反対運動(昭和46年)

フェリーかけろま就航祝賀会(昭和53年)

陸の道・海の道

上・せとなみ初寄港(古仁屋)
下・せとなみ就航(与路)(ともに昭和49年)

瀬戸内町は、奄美大島南部・加計呂麻島・請島・与路島の広範囲から成る自治体である。それによってこの六〇年、各集落間を往来するための陸の道、海の道の整備がすすめられてきた。

まず、陸の道を点描しよう。奄美大島を縦断する国道五八号は、奄美大島で最初に整備された道路であるが、瀬戸内町誕生後から現在に至るまでに道路拡張がすすみ、平成に入ってから町域側には、地蔵トンネル、勝浦トンネル、網野子トンネルが順次開通した。

古仁屋から西古見方面への道路では、昭和三七年に県道篠川線が全線開通してバス路線も運行開始され、昭和四七年には宇検村名柄と久慈の間に県道が開通した。昭和四八年には、古仁屋と西古見の間が県道となり、平成四年にようやく西古見までのバス運行が実現した。昭和三六年には油井トンネル(平成十八年に新しく開通)、平成二七年に久根津トンネルが完成した。

加計呂麻島では、昭和三三年に安脚場と実久の間が、県道に認定されて本格工事がすすめられていった。町道では、昭和五〇年頃に、俵と嘉入、瀬相と西阿室を結ぶラインが整備されていった。トンネルは、加計呂麻トンネル・俵トンネル・呑之浦トンネルの三本が開通した。

海の道では、昭和四五年に照国郵船の鹿児島～奄美航路の定期船「はいびすかす」が古仁屋にも就航。しかし翌年、空前の奄美ブームで夏場の与論島への観光客を優先するため、古仁屋抜港の臨時ダイヤが計画された。古仁屋では反対運動が起こり、結果、一日おきに寄港することで解決に至ったが、抜港問題はその後も数回持ち上がった。

町内では、戦前から各地区と古仁屋を結ぶ定期船があった。与路・請と古仁屋を結ぶ海の道は、瀬戸内町誕生後は、個人経営の「請与丸」から昭和四〇年に町営「こがね丸」、昭和四九年に「せとなみ」へと変わっていった。加計呂麻と古仁屋を結ぶ町営「フェリーかけろま」は、昭和五三年に就航した。それによって車両輸送が可能となり、昭和五五年にはバス路線の運航も開始されて海陸一体の交通体系ができた。「フェリーかけろま」は老朽化にともない、平成六年に大型化されスピードもアップした。そして、町制施行六〇周年の本年十二月、新たな時代の航海を託された、三代目の「フェリーかけろま」が就航した。

中野律紀の民謡日本一を祝うパレード(平成2年)

パッションフルーツ〔阿鉄〕(昭和50年)

旧役場庁舎閉庁の日(平成元年)

平成の瀬戸内

たんかんハサミ入れ式〔清水／斉藤農園〕(平成16年度)

第９回加計呂麻島ジョギング大会(平成8年)

第１回奄美シーカヤックマラソンin加計呂麻大会(平成5年)

昭和から平成に変わる節目の年、瀬戸内町役場は昭和三五年以来の旧庁舎から現在の新庁舎に移転した。新たな平成の時代に入ってまもなく、悲しい出来事があった。平成二年九月十八日、台風十九号の豪雨によって古仁屋市街地の高丘・大湊地区で大規模な土砂崩れが発生し、死者十二名の大惨事が起きた。

台風に打ちのめされていた町民の心に、さわやかな風を吹かせたのは出身者の活躍であった。翌十月、当時古仁屋高校生であった中野律紀が民謡日本一に輝いた。この快挙は現在の島唄評価の高まりの口火であったともいえ、その後、本町出身の元ちとせのJポップシーンでの活躍にもつながっていった。スポーツ界でも平成三年には、緑健児が全世界空手道選手権大会で世界チャンピオンとなり町民に勇気を与えた。平成二年には、島尾敏雄の小説『死の棘』が、小栗康平監督で映画化された。その後、本町では山田洋次監督作品『男はつらいよ　紅の花』(平成七年)をはじめ、映画やTVロケなどが数多く行われていった。

大島海峡を中心とした瀬戸内の海は、宝の海である。明治後期からのカツオ漁業、大正期に沖縄から伝来した追い込み漁、久根津を基地とした捕鯨の時代を経て、昭和五〇年代になると、マダイ、カンパチなどの魚類養殖業がはじまった。現在はクロマグロも出荷されており、その養殖日本一となった。また、加計呂麻側の入江では、日本のなかでも歴史が古い真珠養殖が現在も行われている。大島海峡では近年、新種のフグやサンゴなどの発見が相次いでいる。水中観光船「せと」(平成元年より)も就航しているが、今後、豊かな海洋環境が資源として再評価されていくことだろう。波穏やかな大島海峡を舞台に、平成五年には「奄美シーカヤックマラソンin加計呂麻大会」の第一回が開催され、本年で第二四回を数える。また、「加計呂麻」を冠したものとして、昭和六三年に始まった「加計呂麻ジョギング大会」は、現在「加計呂麻島ハーフマラソン大会」と名前を変えて続いている。

農業は昭和四六年に拓南製糖工場が操業廃止となってから、サトウキビの作付面積は格段に減ったが、平成に入ってから果樹栽培が、特にタンカン、パッションフルーツが伸びていった。

瀬戸内町の六〇年。順風満帆の歩みでなかったがゆえ、その経験と歴史を未来に活かしていきたい。